
電車と掃除機。

二階藤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電車と掃除機。

【NZマーク】

NZ9963E

【作者名】

一階藤

【あらすじ】

その日も、いつもと同じはずだった。

その日は、普通の一 日… はずだった。
いつもの通勤、いつもの電車… そして、いつもの通り鞄の上に
鞄を置き、揺れに合わせてまどろむ。
なにか、特別なことが起こるはずもなかつたのに、それは、起つ
た。

駅に止まり、人が降り、人が乗つてくる。
何の変哲もない光景。

ただ一点。

乗つてくる人が、誰ひとりの漏れもなく、掃除機を手に持つっていた。

最初は、田を疑つた。

掃除機が不必要なモノで無いことくらいわかる… とはいえ、それは
日常生活においての話だ。

自分の持つ常識の中では、明らかに的外れな出来事、事象だったの
だが… どうやらおかしいのは、こつちらしい。

数駅前、少なくとも自分が眠りに誘われて意識を失う前までは、
隣の乗客は、そんなモノを持つていなかつたはずだ。
新聞紙を広げて読んでいた。

別の乗客は、立つてドアに寄り掛かりながら携帯ゲーム機を堪能し
ていた。

それが、今はどうだ… ?

自分が異端者だと言わんばかりの状況ではなかろうか… ?
周りがどう見ているかわからない… 意識したくない… 。

そんな事を考えていたら嫌な汗が額に滲んできた… 。

しかし、そんな状況も長く続くことなく、田舎の駅に電車は到着した。

助かった！…ただそう思いながら、手に鞄をとり、転がるように電車から降りた。

…降りることが出来た瞬間に一つの事に気づく。

…いつも持っている鞄と重さが違う…形ガチガウ…ジブンハナーニモツテイル…？

周りの田舎は、奇異に満ちていた。

(後書き)

実際に、掃除機を抱えながら、電車に乗ってきた人がいた時に思い付いた作品です。まさかの抜き身掃除機だったので、ある意味衝撃的でしたね。機会があったらまた見たいものです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9963e/>

電車と掃除機。

2010年10月8日23時06分発行